

# 常なる磐

つねなる いわ season II  
令和3年7月9日(金)

## ◇ 120年の時を経て

タイトルの「120年」。

校歴に関わる話題で、これまで幾度も登場してきた「創立120年」であるが、本号の主役は校歴ではなく【竹】である。



西門の奥手にある竹林が、この春から急激な変化（赤破線内）を見せた。色で表すなら茶色、まさに立ち枯れ状態だ。

周りの竹林も「碧み<sup>あお</sup>」が薄れ、茶色とまではいかないが黄緑色だ。

子供たちの登校時、見守り隊の皆さんに茶色の竹林を示しながら話をすると、さすが年の功、すばっと明快な答えをいただいた。

「竹は寿命で枯れるんです。枯れる前に一度だけ花が咲き、その後、やはり一度だけ実をつけます。やがてポロリと実が地面に落ちるんですが、この竹の実が栄養があって美味しいらしく、野鼠の好物ときている。だから、竹が枯れた時は野ネズミが大発生するんです。」  
と、見守り隊の奥村さん。

続いて長谷川さんが、

「竹は大きく分けると2種類あって、真竹と孟宗竹<sup>まだけ もうそうだけ</sup>は寿命が違う。ここらあたりに生えているのは孟宗竹だから、60年で枯れる。真竹なら120年だね」との話。博学に感服。



早速、自分でも調べてみた。

【竹】1本1本の寿命は10～20年だが、  
【竹林】自体にも寿命がある。幅が広く60年から120年だと考えられ、竹の種類で竹林の寿命は異なる。ただし資料が少なく、少ない記録をもとにした推察レベル。

※奥村さん・長谷川さんの方が詳しい。



竹は他の樹木のように単独生育ではない。地下茎がつながることで竹林を形成する。

よって、体育館北側の竹林も 2 枚の写真のように全体の色彩が黄色を帯びている。

つまり、比較的近い位置にある小さな竹林は、地下茎でつながっていることが推察できる。

下の写真は【竹の花】が咲いた様子。

▼ネットより拝借▼



竹全体が黄色がかって見えるのは、花が咲いたことによるものだ。

この後、一斉に実をつけていくのだろう。

新たな発見は、所々に【若竹】が確認できること。新たな竹林を形成するための準備が、人の目には見えない地中で粛々と進行している。「種」保存のための営みと、竹の生命力の強さを改めて認識する。

ところで、竹の生命の周期の中で春から夏にかけて竹が枯れ始めるのは、他の植物で言うところの「冬」に該当するらしい。なるほど、真冬でも竹がぴんぴんしている理由がここにあった。他の植物が葉を落とし、冬眠する動物もいる冬が、竹にとっては「夏」なのである。※その一方で筍の旬が「春」というのは面白い。

さて、学校近辺の竹の種類であるが、表面の艶や竹の軽から察するに、体育館北側一帯の竹林は「真竹」の可能性が強い。つまり、竹林の寿命は 120 年。

常磐東小学校が創立 120 年を節目として「ひがしっ子 120 年宣言」のもとに再出発したのと時を合わせるように、学校周辺の竹も新たなスタートを切ったということ。まさに【常磐東 新世紀】の始まりなのである。